

「土砂崩れ、消えた轟音の先に」

千葉県 柏市立柏中学校 2年 <sup>かわぐち</sup>川口 <sup>みゆ</sup>美悠

日本は美しい自然に恵まれた国ですが、その一方で地震や台風、豪雨などによる自然災害も多く発生しています。中でも近年、毎年のように全国各地で発生している土砂災害は、ニュースを通して私も身近に感じるようになりました。「まさか自分の住む地域で―」と誰もが思うことになるかもしれませんが、土砂災害は決して他人事ではなく、日常のすぐ隣にある危険なのだと知る出来事がありました。

私は昨年の夏、家族と一緒に熊本県へ旅行に行きました。その際に見学したのが、平成28年熊本地震の影響で発生した大規模な土砂崩れの跡地です。実際に現場に立ち、土砂が集落を押し流した跡を目の当たりにすると、テレビやインターネットで見るのとは比べ物にならない衝撃を受けました。かつて家があり、人が暮らしていたはずの場所には巨大な岩や倒木が堆く積み重なり、遠くに見える山肌には広範囲にわたる傷跡がむき出しになっていました。

ガイドの方からは「土石流が川のようになって一晩で多くのものを奪ってしまった」という話を聞きました。避難誘導が間に合わなければ、さらに大きな被害が出ていたそうです。私はその説明を聞きながら、「自分の家族がここに住んでいたら」と想像し、胸が苦しくなりました。自然が与える恵みの裏にはこのような恐ろしさも潜んでいるのだと身をもって感じた瞬間でした。

災害の現場を訪れてから、私は「土砂災害はなぜ起こるのか」「どうすれば被害を減らすことができるのか」と考えるようになりました。調べていくうちに、土砂災害には主に「土石流」「がけ崩れ」「地すべり」という3つの種類があること、それぞれに応じた対策が求められていることを知りました。また、近年は気候変動の影響もあり、短時間に大量の雨が降ることが増えているため、小さな川や里山でも土砂災害が発生するリスクが高まっていると分かりました。

私たち一人ひとりができる「防災」には、次の3つが大切だと思います。

1つ目は、「自分が住んでいる地域の危険箇所を知ること」です。市町村から配布されるハザードマップをきちんと確認し、避難所や安全な避難経路を事前に家族で話し合うことが、命を守る第一歩だと思います。

2つ目は、「異変に気づいたらすぐ行動すること」です。大雨や長雨が降った時、川の水位が急に上がったり、斜面から水が湧き出したり、木が傾いたりするのは危険信号です。もし自分がその場にいたら、「まだ大丈夫」と油断せず、早めの避難を心がけたいと思います。家にいる時も、テレビやラジオ、スマートフォンの速報をこまめに確認する習慣をつけないと感じます。

3つ目は、「地域の人たちと協力すること」です。見学した被災地でも、自治会や町内会が中心となって避難訓練や土砂崩れ防止のための草刈り、砂防ダムの点検などを行っていると聞きました。1人では不安でも、地域の人と声をかけ合い、情報や知識を共有することで、安全への備えが何倍にもなります。私自身も学校の防災訓練に積極的に参加し、近所のお年寄りの方の手助けができるような心づかいを持ちたいと思います。

土砂災害を防ぐためには、国や自治体が進めるインフラ整備や警報システムの充実も重要です。しかし、1番身近で自分の命と家族の命を守れるのは、「日ごろからの備え」と「自分の行動力」と信じています。災害は、いつどこで起こるか分かりません。被災地を訪れた時の寒気や恐ろしさを胸に刻み、「自分だけは大丈夫だろう」と思い込まず、「備えること」「学ぶこと」「伝えること」を大切に生きていきたいです。

災害のニュースを見るたび、命の重みや、普段の平和な日常がどれほど尊いものかを考えさせられます。もしまた災害現場に見学に行く機会があれば、今度は自分の地域と重ね合わせ、「自分だったら」「自分たちの町だったら」と想像しながら、家族や友人と防災について語り合いたいと思います。そして、自分の経験や学んだことを、未来の命が守られるよう、日々の意識で「土砂災害ゼロ」を目指します。